

黄泉国訪問神話（その1）

— 死の起源をめぐる問題 —

大内建彦

1 創世神話をめぐる三つの神話

紀本文の載録内容に従って、国土の創成から宇宙の各領域の主宰者たる三貴子誕生までを創世神話と呼んでよければ、これまで分析対象としてきたキ・ミ二神を主役とするオノゴロ島上での神婚譚と、それにつづく胎生型の大八島生成譚はその創世神話の前半部とも称しうる箇所だが、この間の記紀伝承間双方の主張する神話モチーフあるいはその呈示するイメージ上の差異といったものは、大きくヒルコ記事の有無をめぐる問題として集約できる。そして、これから分析対象とする後半部について言えば、記と紀本文間での決定的なくいちがいともいふべき「イザナミの死」を語るか語らないかという大問題が横たわっており、根の国訪問を主体とするいわゆる大國主神話を含むか含まないかという問題とならんで、記紀双方の体系神話を讀みとく上で、最初に最大の難問難関がまず待ちうけている。かてて加えて、このイ

ザナミの死を介在させる記が必然的にイザナキ単独で三貴子を化生させる型式をとるのに対して、イザナミの死を介さぬ紀本文はひきつづきそのままキ・ミペアで三貴子を誕生させるといふ筋立てをとっており、その際、前半部のアポリアの要にあったヒルコがこちらではこの三貴子に列して出生するというように、二書間の語りに大きな齟齬が認められる。このイザナミの死を挟んでヒルコ記事が記紀双方で前後して重出するという事情を含めて、キ・ミ二神を主体として語る神婚からこの三貴子出生に至るまでの部分は、これまでの論考で明らかにしたように、大きく見積って少くとも異なる三つの類型の神話型式が重層し且つ、先後複合して全体をなしているものと見受けられる。その一つは、紀本文に顕著な陰陽二神による左右からの「天柱」めぐりに象徴されるように、中国伝来の五行説等に基づく陰陽二元論に則った宇宙の発生を説く思弁的な神話型であり、今一つは、キ・ミ二神の初生児が生み損じであったという記のヒルコ伝承に明らかに見て取

れるように、キ・ミ二神の人間的な婚姻にまつわる話は本来、洪水兄妹型の始祖神話に属するもので、より一般化していえば、人類の起源を説く神話類型の一つと見なしうるものであり、もう一つは、火神カグツチのもたらすイザナミの死を契機に、キ・ミ二神にそれぞれ俄然巨人神的な天父地母の性格が露わになるが、これに関して言えば火の誕生を媒介として天地分離が果たされ、その結果として日・月が生まれるといった宇宙創成の神話の一類型とみなしうるものであって、都合この三つの神話類型が合体接合して創世神話は編成されていると断じてよい。これら三つの神話類型が重層的且つ複合的に合体し、その全てがキ・ミペアー神の事蹟としてその名の下に整合化されているわけである。こうした視座に立つことで、大八島生成に至るまでの創世神話の前半部にあたる部分について全体的に疎漏なく緻密にして且つ多面的に妥当な解析を加えたとと思うので、そちらを参照ねがうとして、ここではつづく後半部へと歩を進め、三貴子誕生に至る展開部分に更なる分析を加えることとしよう。

2 イザナミの死の位相とその意味——記紀の差異

さて、紀本文がイザナミの死について全く触れないことは既に述べたが、それに反して記の方は周知のようにイザナミの死を契機に夫イザナキが妻のもとを訪ねそこから逃げ還るといふ、いわゆる黄泉国訪問神話という長い話がそれにつづいている。まとめりよく物語りに富んだ展開を見せる話として著名だが、これまでしばしばこの黄泉国

がどこにあるのか、古事記に垂直的な三層構造はたして内在するのかといった点に議論が集中し、この神話展開のそもそのモチベーションをなすイザナミの死そのものがいかなる意味なりイメージなりを有するのか、はたまたこの死の話と後続の黄泉国訪問神話とがいかなる論理でどのような説話レヴェルで結びついているのかといった点が、紀本文がこの伝承をはなから無視してかかり採用していないというような点を含めて、十分に吟味されてきたとはいいがたい。専ら全体的なイメージに寄りかかり、例えばヨモツヒラ坂等に議論を集中させるにまかせて、恣意的部分の拡大解釈を重ね黄泉国のありかやその位相を詮索してみせるといった昨今の研究状況は、神話そのもののもつ固有の構造や論理といったものを等閑視してきたきらいがある。従って黄泉国はどこにあり、どのようにイメージでされているかについては勿論重要且つ重大な論点でもあるので、該神話の先後のプラグラフや神話本体の内実諸要素など諸問題に十分な検証検討を加えた上で、改めて神話全体とも相関させつつ、根源的な分析を加え、黄泉国の位置づけなり比定なりをも試みるつもりであるので当面は触れずにおく。

さてそこで、黄泉国訪問神話への地平を拓きその継起をなす、火神カグツチのもたらすイザナミの死といったものがそもそもいかなる位相にありいかなる様態いかなる神的イメージを有する死であるのか、この避けては通れぬ大問題をまずターゲットに分析を進め深めてみよう。

さてここで、このイザナミの死にいたるまでの記事については記紀

間でその異伝も数多く、従って諸伝を見わたしやすくするために神統譜に位置づけつつ列挙して示してみよう。もとより神統譜に倣おうとするのは、記に特長的なようにこの部位は物語がほとんどなく、「次に……神、次に……神」といったように単純きわまりない神々の簞生記事に基づいて、創世神話の展開を図ろうとしているからであるが、以下にそれを表示してみる（次頁）。

さて、まず手はじめに、火神カグツチによるイザナミの死の要素をもたないそつけないまでに簡略な紀本文の伝承の方からとりかかってみよう。紀本文の神統譜はみての通りきわめてシンプルである。創世を語る神話だからもう少し虚飾があったり、それなりの仕掛けがあったりも良さそうにも思えるのだが、大八島の創成からその宇宙の主宰神たる三貴子を生みなすまでの国土・国家のベースを基礎づける遠大な話が、神統譜という骨格だけの呈示に依拠し、ほぼこの系譜の中でこととおさまっているかに見える一方で、記の方が極端なまでに肥大化し複雑化した内容を持ち、双方対照的性格をみせる点で興味深い。ところでこのキ・ミ二神の創造的活動と神話上からの去就といった点について今少し詳しく見ておこう。

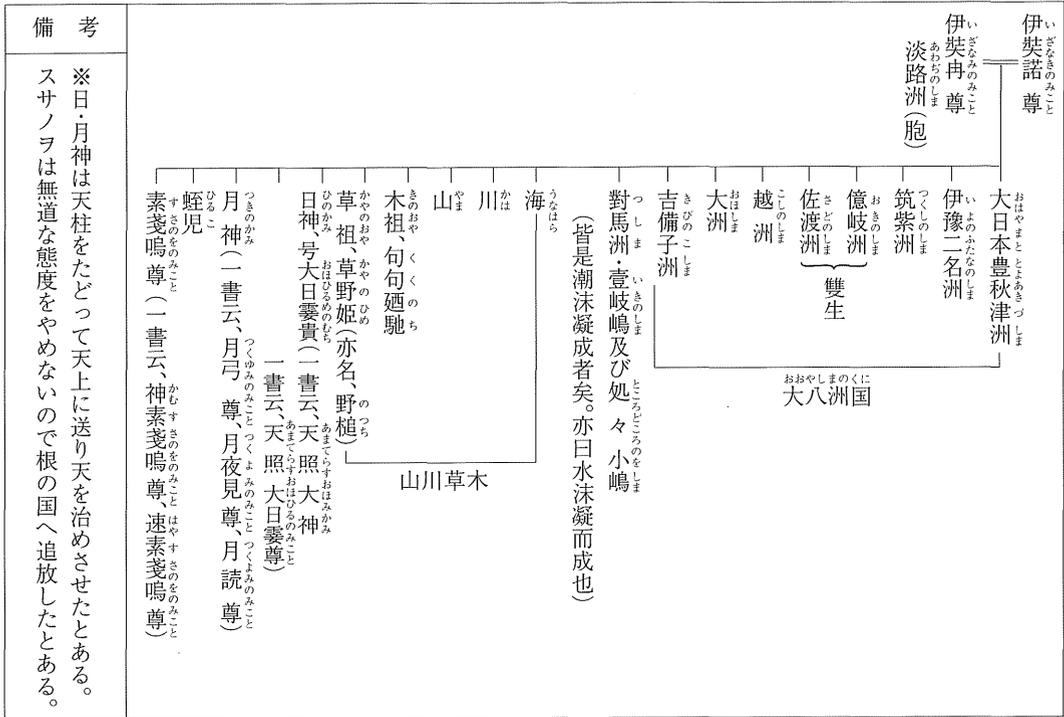
イザナキ・イザナミは結婚し協働して大八島を創造し、つづいてその大地の上に山川草木を生みなし自然を豊かに整備した上で、その宇宙の主宰神として日・月神・スサノヲの三貴子を生みなす。そしてそれぞれ三神の支配すべき領域の指示詔命を終えた後、この時点で二神は神話舞台から完全に撤退することとなる。こうした神話ストーリー

に即するかぎり、一貫してあらゆるものの生成を請け負うメデイエーターとしてのキ・ミ二神像はさしずめ超越的な霊力をもった世界巨人といったところだろうか。

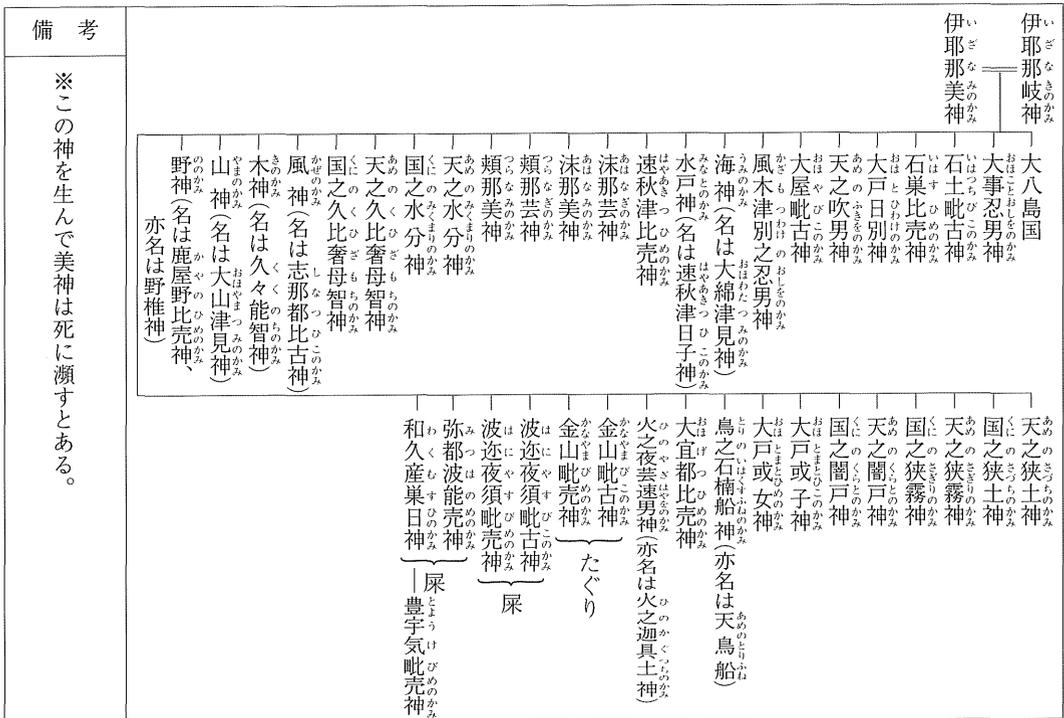
ところでこのキ・ミ二神の隠退のありようは次のごとく記述される。すなわち紀第六段本文条で、イザナキは「その事業をすべて終えておかくれになることになった。そこで幽宮を淡路洲に作つて静かに長くおかくれになった」とか、イザナキは「その事業を終えられたが、その神徳はまことに偉大であった。ここに天にのぼって報告され、日の少宮に留まられたという」と伝えられる。二人はこの時点で神話舞台から完全に退き、アマテラスとスサノヲへと主人公役を譲り渡し以後再び登場することは一切ない。

ところで、右のようにキ神は天上の「少宮」に登つて留まったとすような記事を有するが、イザナミについては何ら記するところがなない。一貫してペアー神として扱ひそう説示してきておきながら、その最後に来て一方だけに後日譚を記して一方を無視し去るというのは何とも腑におちない。つまりキ・ミ二神は本来的に緊密に結びついたワン・セットとしてのペアー神ではなく、イザナキは陽神として天空により密接にかかわる存在であり、それに対してイザナミは陰神として大地とより密接にかかわりをもつ性格を有し、二神は相反する対立原理を内包しつつ、それぞれが自立独立しうる存在態であることを自ら説示しているのではないだろうか。その紀本文と、第五段中の二つの異伝をのぞいて、記とその他の九つの異伝の全てが火神カグツチがミ神

紀本文の神統譜一國生みから神生み



記の神統譜一國生みから神生みへ



<p>備考</p> <p>※ホムスビを生んでミ神は死亡したとある。</p>	<p>冉神</p> <ul style="list-style-type: none"> 火産靈 水神罔象女 土神埴山姫 天吉葛 (二云、與曾豆羅) 	<p>五—3</p> <p>備考</p> <p>※日・月神には天地を、スサノヲには地下の根の国を治めさせるとある。</p>	<p>伊奘諾尊</p> <ul style="list-style-type: none"> 大日靈尊 (左手の白銅鏡) 月弓尊 (右手の白銅鏡) 素戔鳴尊 (首)
<p>備考</p> <p>※カグツチを生んでミ神は病にかかるとある。◎五—5では、ミ神は火神を生みやけどを負って死ぬ。そして紀伊国の熊野の有馬村に葬ったとある。</p>	<p>冉神</p> <ul style="list-style-type: none"> 火神軻遇突智 金山彦 (吐) 罔象女 (小便) 埴山媛 (大便) 	<p>五—4</p> <p>備考</p> <p>※スサノヲは遠い根の国を治めさせるとある。カグツチを生んでミ神は死亡するとある。</p>	<p>諾神</p> <ul style="list-style-type: none"> 日月 蛭児 素戔鳴尊 鳥磐餘樟船 火神軻遇突智 土神埴山姫 水神罔象女 <p>椎産靈</p> <ul style="list-style-type: none"> (頭上) 蚕と桑 (臍) 五穀

<p>備考</p> <p>※記型と同工伝承。カグツチを生んでミ神は死亡したとある。</p>	<p>諾神</p> <p>大八洲国</p> <ul style="list-style-type: none"> 級長戸辺命 (氣) (亦曰、級長津彦命) (風神) 倉稻魂命 少童命 (海神等) 山祇 (山神等) 速秋津日命 (水門神等) 句句迺馳 (木神等) 埴安神 (土神) (萬物) 火神軻遇突智 	<p>五—6</p> <p>備考</p> <p>※ミ神の死を前提としているか。カグツチをキ神が剣で斬る。</p>	<p>軻遇突智</p> <ul style="list-style-type: none"> 雷神 大山祇神 高靈 (又曰、磐裂神) (根裂神、磐筒男神) (磐筒女神、経津主神) <p>血</p> <p>劍の三段</p>
<p>備考</p> <p>※ミ神の死を前提としているか。</p>	<p>伊奘冉尊</p> <ul style="list-style-type: none"> (杖) 岐神 (本號、来名戸之祖神) (首) 大雷 (胸) 火雷 (腹) 土雷 (背) 稚雷 (尻) 黒雷 (手) 山雷 (足) 野雷 (陰) 裂雷 	<p>五—9</p> <p>同上。</p>	<p>軻遇突智命</p> <ul style="list-style-type: none"> (首) 大山祇 (身中) 中山祇 (手) 麓山祇 (腰) 正勝山祇 (足) 離山祇 <p>五段</p>

<p>備考</p> <p>※スサノヲがオホゲツヒメを殺し、その体に生じた種はカミムスヒが保管。</p>	<p>大気都比売神</p> <ul style="list-style-type: none"> (頭) 蚕 (二つの目) 稻 (二つの耳) 粟 (鼻) 小豆 (陰) 麦 (尻) 大豆 	<p>備考</p> <p>※ミ神の死を前提としている。</p>	<p>五―10</p> <p>(睡之神) 速玉之男 (掃之神) 泉津事解之男</p> <p>磐土命(入水) 大直日神(出水) 底土命(又入) 大綾津日神(出) 赤土命(又入) 大地海原之諸神(出)</p> <p>伊弉諾尊</p>
	<p>参考―記のオホゲツヒメ神話</p>	<p>五―11</p> <p>諾神</p> <ul style="list-style-type: none"> 天照大神(高天原) 月夜見尊(日に配ぶ) 素戔嗚尊(青海原) (頭) 牛馬 (額上) 粟 (眉上) 蚕 (眼) 稗 (腹) 稻 (陰) 麦・大小豆 <p>保食神</p> <p>※ミ神は登場せず。ツクヨミが保食神を殺し、アマテラスは保食神から生じた五穀、蚕などを種として保管。アマテラスとツクヨミの昼夜交代が説かれる。</p>	

を死に至らしめたことを説くか、そのことを前提とするかの話となっており、火神によるミ神被殺を説く型式の神話が圧倒的に根強く存在し、こうした伝承に照らして、イザナミという神格がいわゆる殺された女神型、あるいは地母型の神話類型を代表し象徴するような存在態であることを強く示唆していよう。となれば記の日・月神をはじめとする三貴子がキ神から単独化生するというありようは、イレギュラーなことではなくむしろ天父地母的な対立原理にかなったにつかわしい化生譚とも思われ、冒頭の洪水兄妹型始祖の神話主人公を担うキ・ミ二神とは全く異質の神格であるといった点に十分留意すべきであろう。

ところで紀本文にみえるイザナミには火を媒介とした死を説く記述をみないために、火が天地を分離したといったダイナミックな宇宙創成をとく神話的側面が読みとれないが、しかし三貴子を生み終え、三分治の詔命を果たしたあとでキ神だけが天上に上って若宮に留まったという記述は天父的性格が採曳しているかに見え、そこから翻って何の記述もなく地にとり残されたかの感のある一方のミ神に地母的性格の残影が見て取れるらしくも思われるのだがいかがだろうか。

話は一転するが神話世界における明暗の問題についてここで少々言及しておきたい。先入観にとらわえることなくごくごく自然に真摯によむかぎり、紀本文の神話の世界は日月をはじめとする聖なる三貴子の誕生をまつてはじめてこの宇宙天下は光明に満ちあふれたと起源にさかのぼって説いているのであるが、従ってこれ以前は混沌とした幽冥的世界であったということになるか。これに対して、記の説くと

ここに注目していえば、始源の世界においては何ものにも先がけて「高天原」なる特権的な聖域がもち出されているが、この政治的文化的領域の呈示によって、宇宙の初源的な空間はすでに「高天原」的な聖域がすでに開かれていることをもっていく分か薄明めいた世界を想像させるものをもっているかに見えるが、いかがなものであろうか。記のイデオロギッシュな世界観の垣間見える一齣と見えないか、なお後考を俟ちたい。

ところで一方、記の方はイザナミの死をもたらずカグツチの誕生までも先掲系譜に見ることく夥しい数にのぼり以下、イザナキが訪ねる黄泉国の話を挟んで更に、死の穢れをそぐべく日向の水辺で実修する禊の際にもあまたの神々の誕生があり、その果てにイザナミの左目・右目・鼻からそれぞれアマテラス・ツクヨミ・スサノヲの三貴子が誕生するという筋立てになっており、迂遠な神々の羅列のあげくにやっと最重要の三貴子誕生のシーンにたちあうことになる。紀本文のそつけないばかりに簡略なあり方とはちがって、記の伝承の過剰なまでの饒舌ぶりは、記紀体系神話の中でも際だった特異な現象をみせる一大事例として銘記されてよい。

ところで、当然のことながら、右に掲出した系譜部分はその大半が火神カグツチがイザナミの死を将来するあたりまでのもので、これらの記紀間の異伝をいくらか比較検討してみたところで、黄泉園訪問神話本体に射程の及ぶうる比較研究的成果といったものを望みえぬことはいうまでもない。従って、黄泉園神話本体を構成するこまかな要素等

についての検討は稿を改めて試みるとして、ここでは簡単に黄泉園訪問神話のストーリーに照らして、この神話を普遍型として位置づけるとして、いかなる意義意味類型に属する神話として定位できるかについて考えておきたい。というのは、例えば創世神話の中で人類の起源について語られるのは当然のこととして、生の神話があればそれに対応して死の神話がどこかに組み込まれているであろうし、水の神話があれば火の神話も召喚されるであろうし、日月に表象される天体や宇宙の運行をめぐる神話には不可避的に農耕や漁撈の起源と結びついても有しているだろうし、英雄の出現は王権の神話の発生と不可分であろうというように、神話には神話に固有のシンボリズムや世界観あるいは信仰や論理を内在させ、それらが相互にリンクし、進化なり発達発展の論理なりの下で歴史化し体系化するのを普遍とするからである。

さて、この黄泉園訪問神話は女神イザナミが火神カグツチによって殺され、このイザナミの死を媒介として成立している。死んだ妻イザナミを追って夫イザナキが異界としての黄泉園を訪れるが、死体を「覗きみるな」のタブーを課されながら、それを侵犯したために追われるはめとなり、何とか無事に逃げおおせて帰還することに成功するものの、これを機に生者イザナキは死者イザナミとの本質的にア・プリアリな永遠の離別を余儀なくされるという説話内容をとまなっている。「見るな」のタブーを提示され、それを犯すことで決定的な離別がもたらされるいわゆる異類婚姻譚に不可欠の要素をも布置しながら

ら、この神話の全体は生がのがれがたく死というものの蔽存を内包し且つ、以後一切の生死の没交渉を説く死の起源説明神話の一類型と見なしうるものである。その内容は記と紀の第五段第六の一書の二伝ともほぼ一致しており、そして両伝ともその内に入れ子構造式に、千人を死に追いやる、その代り千五百人産んでみせるといった、いわゆる対立いい負かし型の生死の起源神話をも内在させながら、その全体は死の起源説明神話として十全に機能するものを具備した類型的代物であると認定しうる。

さて、このように女神イザナミは火神カグツチを生みなすことで死に至り、暗黒と穢れにみちた地下的世界への参入をよぎなくされる。そんな女神の異様な姿に驚愕した男神イザナキは女神のいる死者の国から命からがら逃げ還り、日向の水辺で死の穢れを祓禊し、そのプロセスで聖なる日・月といった天空にかかわる三貴子を化生させたと言ふように、イザナミの死を媒介に継起するキ・ミ二神の対立的要素や原理といったものは、黄泉国神話と三貴子誕生の神話といった神話の大きな枠組においても相関し、相互補完的に深く連関し合い、緊密な内的対応とともに表象するという点で好一対である。体系神話上における複数神話間に認められるシンボリックな対応関係は先の挙例にとどまらない。

ところで、イザナミ自身が人間大であるのかないのか、女神自身の神格およびイメージはどうあれ、記紀の神話においてまず最初に死を体験するのはこのイザナミである。しかしこのイザナミは遡れば記の

創世神話において見られたように、人類最初の結婚に伴う性の起源を担う存在でもあった。具体的な男女双方の身体構造をあげつらって性交法を明かすレクチャー的な記述、あるいは紀第四段第五の一書で鶴鴛に交道術を学んだとあるように、明らかに性の起源がこのイザナミに託され結びつけられてもいる。更にこのイザナミは火神カグツチを産んだがために陰部に火傷を負い死に瀕するわけだが、その際自らの吐瀉物、排泄物から様々な農産、鉱産、窯産といった人類の文化の基本にかかわる重要な文化神を次々と生成する存在態でもある。更にこのイザナミは死した後黄泉国に赴き、そこへ迎えにやって来た生者イザナキと最終的には対立し、お互い自らの所属世界の原理に従って「千人殺す」「千五百人産む」と宣言することで、この世界の人類に限りある生と死を具体的にもたらしたことが記述されている。このように記紀神話の第一世代のキ・ミ二神には、この二神を対立的に扱う中で、その一方のミ神を通じて様々な生と死の起源譚が彼女に結びつけられて叙述されている。人間は死すべき存在であるが、男女の性交によってもたらされる生殖を介して人間の命は子孫から子孫へと受け継がれてゆくわけで、性と生殖の起源と死の起源はいわば表裏一体の説明原理となつていとみていい。記紀創世神話におけるイザナミは火神を産んで死ぬと同時に新たな文化を産み出すために、死から新たなものを創造し、あるいはくり返し再生産を促し、野生や自然から文化への移行を可能とするメイデーターにして且つ象徴的な存在態だといつていい。

如上のように、このイザナミには様々なシンボリックな複合的神格がまとわされているが、このイザナミにはもう一つ大地母神的な殺された女神型の新たな文化の起源をもたらす神としての性格が顕著である。先に表示した神統譜をみても明らかのように、このミ神がカグツチを生んで死亡するという記事や系図のその周辺で、様々な作物や食物の栽培の起源にかかわる女神をめぐる異伝が集中的に見られるという事情がある。紀第五段第十一の一書のウケモチの伝承や同じく第二の一書のワクムスヒの伝承やら、あるいは記のオホゲツヒメの伝承もそれに含めて考えていいと思われる。イエンゼンの主張するいわゆるハイヌウエレ型、つまり殺された女神型の作物起源神話として括りうるもので、女神が殺されたことを代償にこの世界に作物が発生したことを説く神話類型の一つだが、例示したウケモチやオホゲツヒメの神話はその典型例とでもいえるもので、とりわけこのウケモチの神話は日・月の天体の運行とも絡むダイナミックな世界観を孕みもつ神話となっている。太陽や月と作物とを結びつける密接な関係について考え合わせれば、植物のサイクル、日照、月の満ち欠けといったものを巧妙にとり込んだ高度に思弁的な神話とみなしうるものである。もう一つのワクムスヒの話は「カグツチ、ハニヤマ姫を娶^まきて、ワクムスヒを生む。此の神の頭上に蚕と桑と生れり。臍の中に五穀生れり」といった単純な神話であった。これだけではこのワクムスヒが殺された

存在であるかどうか不明だが、ワクムスヒの身体の各部位に穀物や蚕等が生じたという記述内容や、加えてここに見られるカグツチとハニヤマヒメとの関係はカグツチによって殺されたイザナミのそれとパラレルなるものを感じさせ、死したイザナミの身体に様々な作物神が生じたとする共通の型式等といったものを考え合わせればワクムスヒの話も同工なるものの異伝の一つに還元しうるのではないかと思う。

ところで、レヴィイロストロースがつとに指摘したように、火の将来はわれわれの世界や社会が自然から文化へと移行することを可能にしたが、火神を媒介に様々な文化や文化神が発生し派生したとする神話が数多いのはそうしたことの証左以外の何物でもない。記紀体系神話においてイザナミ神のもつ意義やその果たす役割が以上のごとくはなはだ大きく多様であり、この女神の上に複合し重層する神格については更なる深い究明が必要であることはいうまでもない。

ともあれ陰陽神のうちの一方の陰神として、最初の夫婦神の片われれの世界に生と死とそして性の起源をもたらし、そして火と文化の起源をもたらすシンボリックで複合的性格を自ら体現する神としてわれわれの前に立ちあらわれているという、女神イザナミのそのコンプレックスなありようについては改めて考え直してみる必要があるようだ。